日本におけるユダヤ学の現状[1] ―学術団体の趣意書等の考察―

平岡　光太郎
同志社大学大学院神学研究科

要旨

北米では第二次世界大戦後にユダヤ学が人文科学の内の一学問と認識されるようになり、2005 年にはユダヤ学に関する分野の学位授与を行なう機関の数が 70 以上に及ぶ。一方、日本ではとくに近年になって、ユダヤ学の興隆が見られるようになった。現在では、ユダヤを対象とする主要な研究会・学会として、「日本ユダヤ学会（旧称：日本イスラエル文化研究会）：1960－」、「神戸・ユダヤ文化研究会（旧称：日本・ユダヤ文化研究会）：1995－」、「京都ユダヤ思想学会：2008－」を挙げることができる。本稿では、それらの学術団体の趣意書などの考察を通して、日本においてユダヤ学がどのような方法や目的を設定しているかを確認し、日本のユダヤ学史の一端を示すことを試みる。

キーワード

日本ユダヤ学会、神戸・ユダヤ文化研究会、京都ユダヤ思想学会、ユダヤ学、ユダヤ学史

はじめに

ユダヤ・イスラエルと呼ばれる集団は、紀元前より存在し続け、その集団ないし集団の性質理解が、長期に渡って内在的・外在的に試みられてきた。中世まで、この試みの外在的な担い手として多くのキリスト教徒がおり、神学は主要な舞台の一つであった[2]。近現代では、大学制度の展開と共に、その担い手は、さらに諸学問に携わる人々へと広がりをみせており、これを西洋キリスト教文化圏における展開と考えることができる。このような西洋キリスト教文化圏で形成されたユダヤ観に反対して、19 世紀のベルリン大学で、ユダヤ人学生たち自身による「ユダヤ教の科学」（die Wissenschaft des Judentums）が提唱されるようになり、第二次

世界大戦後には、西欧文化圏でユダヤ学（Jewish Studies）が人文科学の内の一学問と認識されるようになった。

一方、本邦では、「ユダヤ」という固有名詞を冠する研究会・学会が、1960 年代より設立され、同志社大学では 2005 年より一神教学際研究の枠組みで「ユダヤ学」の授業が始まった。これらは、日本におけるユダヤ学の顕著な興隆と見なすことができると思われる。

本稿では、「日本ユダヤ学会（旧称：日本イスラエル文化研究会）」、「神戸・ユダヤ文化研究会」、「京都ユダヤ思想学会」が刊行している会誌に見られる趣意書などの考察を行い、日本におけるユダヤ研究への姿勢を理解することを試みる[3]。なお日本ユダヤ学会は「日本イスラエル文化研究所（仮）設立の趣意」という表現を用いており、神戸・ユダヤ文化研究会が「『日本・ユダヤ文化研究会』の発足に向けて」、京都ユダヤ思想学会が「『京都ユダヤ思想学会』発足のご挨拶」という表現を、それぞれ用いている。以下、設立年代の早いものから順に考察を行う。

1. 日本ユダヤ学会（旧称：日本イスラエル文化研究会）[4]

現在日本ユダヤ学会が継承している「日本イスラエル文化研究所（仮）設立の趣意」は、1960 年に作成され、会誌である『ユダヤ・イスラエル研究』の創刊号（1961 年 10 月）より掲載されるようになる。創刊号の趣意の最後には、創立発起人として、以下の 9 人の名前が職名と共に 50 音順で掲載されている[5]。倉内史郎（東洋大学教授・教育学）、久留島秀三郎[6]（同和鉱業 KK 社長・日本ボーイスカウト連盟理事長）、小林正之[7]（早稲田大学教授・西洋史）、杉田六一[8]（イスラエル史研究家）、西村関一[9]（社会党代議士）、長谷川真[10]（旧約学・ヘブライ語研究家）、林知己夫[11]（文部省統計数理研究所員・統計学）、馬場嘉市[12]（青山学院大学講師・旧約学）、山本吉雄[13]（公認会計士）。

この趣意は、同誌の第 3 号（1964 年 9 月）より「日本ユダヤ文化研究会設立の趣意」となり、この組織が研究会と位置づけられたことが伺える。『ユダヤ・イスラエル研究』第 20 号には、小林正之の死去にともなう追悼文が掲載されており、そこでは、学会の趣意書を小林が執筆したことの言及がある[14]。「日本イスラエル文化研究会」という会の名称は、2006 年 5 月から「日本ユダヤ学会」へと改称されているが、学会がこの趣意を今後も継承・尊重していくことが確認されている[15]。2009 年 9 月現在、『ユダヤ・イスラエル研究』は第 23 号を数え、この趣意はこれまで毎号で掲載されている。

次に趣意書の内容を以下に見ていく。この趣意では、すでになされているユダヤ研究の成果ならびに傾向が、3 つの学問分野において指摘されている。それぞれの分野は「旧約学を中心とする諸領域におけるイスラエル研究」、「回教（イス

ラム）圏研究」、「『ユダヤ人問題』論議ないし、研究」[16]（傍点は原文にあるもの）である。

第一の分野である旧約学を中心とするイスラエル研究は、古代オリエント学における活況に伴って、著しく深化したと考えられている。しかし、この分野の傾向として、古代中近東世界への集中、またキリスト教学的な解釈態度が指摘されている。ユダヤないしイスラエルの本格的研究において、これらの傾向が不十分となる理由は、ユダヤ民族の生活過程とそのもろもろの文化的所産が「古今をつらぬき東西にわたって、特定の時代と地域に限定して扱うべく余りに世界史的なもの」[17]だからであり、「キリスト教的なものの前提としてのみとらえるべくは、余りに独自なもの」[18]だからである。

第二の分野、第一次世界大戦前のトルコ帝国時代からなされてきた「回教圏研究」は、日本の学界に一つの特徴的な伝統を形成し、大きな成果を上げてきたことが周知のこととされている。そしてこの分野における傾向として「近代以後の『パレスチナ問題』――そのかぎりのユダヤ人問題――へのアプローチは、少数の例外を除き、多くはこの線における中東問題ないしアラブ世界研究の一環として行なわれてきた」[19]ことが指摘される。この傾向で不十分な点は、近代パレスチナないし現代イスラエルの問題が「ユダヤ的観点からすれば、亡国以来の民族の流浪受難、特に近代ヨーロッパ諸国における苦悩と隷属からの脱出の努力――ひいて民族伝統の自由理念――につながる面がある」[20]ことが見過ごされがちなことである。つまり、近代ユダヤ民族史の内在的理解が見落される点である。

第三の分野である「『ユダヤ人問題』論議、ないし研究」は、特に大正中期以来著しい経過をたどりつつ今日におよび、日本におけるユダヤ研究に関連して見逃すことのできぬ一つの流れであると考えられている。そしてここにおいては成果として取り上げられるものはなく、問題となる傾向が指摘されている。この分野は大別して反ユダヤと、親ユダヤの二大系統の運動と理解され、「異常な熱をおびたこのような二つの運動がわが国においてそれぞれ 40 年 30 年の歴史をもち得たということは、驚くべき事実」[21]とされている。この趣意が書かれるまでの過去 40 年間の多種多様な文献において、相反するこの二つの立場は、以下の 4 つの点において同じ姿勢であるとして批判される。それらの 4 つの点とは、基礎的知識の驚くべき欠乏、論証の非合理性、反歴史性、ファナティックな一種の人種主義と結びついた怪奇な政治的傾向性である。ユダヤ禍論を自称していた反ユダヤ側は、今次敗戦とともに少なくとも表面的に終息した形をとったが、なお再現のきざしを見せており、これに対し、親ユダヤ側は戦後イスラエル共和国の誕生を機縁として再編され、「日猶（日本とイスラエル）同祖論」に立って日猶親善を唱えている状態であると言及されている。

以上のような三つの分野に対して、この趣意で望まれるのは、全く別種の問題意識をもってユダヤないしイスラエルの問題に取り組む姿勢であり、また冷静な客観的態度と厳密な論理的手続きをもって到達し得た研究成果が発表され、社会的に表現されていくことである。そして先の分野によって養われたユダヤ観は抜きがたい古き根とたとえられ、「この古き根の跡に別の土壌に育まれた若木の苗を植え込むことは、ユダヤ学[22]に志す者の上に課された今後の重要な任務」[23]と考えられている。

そして「別の土壌に育まれた若き苗」である新しいユダヤ観を目指して、趣意の中には四つの在りようが研究組織の構想として示されている。第一の構想は、イスラエルないしユダヤの生活と文化そのものを中心課題とし、それに対して純粋に知的また人間的興味を持つ人々が、信仰、職業、研究領域などそれぞれの立場を問わず、ただ学問的真実への憧憬の念において協力し啓発しあう研究組織である。そして第二の構想として、イスラエル・ユダヤの生活と文化をあらゆる時代あらゆる場所にわたって問題とするような研究組織が考えられている。第三は、その問題を特定の方法論（宗教学的、キリスト教学的、言語学的、古代史学的）に限定せず、ひろく人文科学、社会科学、自然科学諸部門のあらゆる角度から取り上げるような研究組織である。第四の構想では、在来の反ユダヤ的ユダヤ論議（「フリーメーソン」論的、「シオンの議定書」論的）、また日猶同祖論的なイスラエル研究とは意識的に自己を区別し、むしろこの種の議論ないし運動を、日本におけるユダヤ学の一研究対象として分析しかつ批評するような研究組織が想定されている。そして、このような組織を通じて、研究者間の「連絡と知識交換の一層の徹底をはかり、かたがたイスラエルないしユダヤに関する正しき理解の普及のために、得べくんば啓蒙の役割をも果たしたい」[24]というような夢を託して、研究会の設立が発起されたとされている。

上述した「日本イスラエル文化研究会」から「日本ユダヤ学会」への改称は、このような趣意に則って行なわれた 40 年にわたる研究会の活動の結果と、本邦におけるこの分野の研究活動がかなりの進展を見た結果として、「『学会』を名乗るべき段階に達した」[25]と会員の間から提案があったことに端を発する。なおこの研究会が英語表記として Jewish Studies を掲げていたことも「ユダヤ学会」に改称する自然の理由の一つとなったとされている。「イスラエル」という名詞が学会の名前から無くなりはしたものの、現代イスラエルがこの会の主要な関心事の一つであることには変わりないとされている。

2. 神戸・ユダヤ文化研究会（旧称：日本・ユダヤ文化研究会）[26]

「『日本・ユダヤ文化研究会』の発足に向けて」は 1995 年に作成され、その機

関紙である『ナマール（港）』の創刊号（1996 年 7 月）より掲載されるようになる。創刊号の最後には、会長の小岸昭[27]（2001 年に京都大学総合人間学部を定年退職）の名前が掲載されている。この研究会は 2004 年度より「日本・ユダヤ文化研究会」から「神戸・ユダヤ文化研究会」へと改称を行なっている。2009 年 9 月現在、『ナマール』は第 13 号を数えており、毎号にこの「『日本・ユダヤ文化研究会』の発足に向けて」は掲載されている。また『ナマール』には、共に掲載されてきた「日本・ユダヤ文化研究会会則（抄）」があり、そこには研究会の指針が書かれているため、これも考察する。

この「『日本・ユダヤ文化研究会』の発足に向けて」は 1995 年に起きた神戸の街を襲った激震への言及から始まる。これは、この発足に向けてのはじめてのアナウンスが、地震が起きるちょうど 60 時間前に神戸・三宮でなされていたことによる。そのときの提案の趣旨は、「従来、とかく興味本位のとらえ方をされがちだった日本とユダヤの接点をできる限り正しい視点から探る」[28]というものである。

続いてこの「『日本・ユダヤ文化研究会』の発足に向けて」は、アジアにおけるユダヤ系の人々とユダヤ教徒の歴史的な移住に言及している。それはイエズス会宣教師のなかに少なからず含まれていたユダヤ系の人々のことであり、今を遡る 1000 年前、空海（774－835）も訪れた中国河南省開封市にひとつの伝統を築いたユダヤ教徒の人々のことである。そしてここから 16 世紀以前に、本邦にもユダヤ人がすでに到達していた可能性を考えるが、これを巷にあふれる俗説に流されることなく、しっかりした方法論をもって忠実に接近する必要を主張している。また明治以来日本に流布している一連の反ユダヤ主義文献に批判の目を向けていくことも言明されている。

そして 1940 年代、地球上で唯一の無査証上陸地であった上海を経由してやってきたドイツ系ないしポーランド系ユダヤ人、さらに戦後欧米各国から移住してきたユダヤ人が、神戸に現在も住んでいることに「『日本・ユダヤ文化研究会』の発足に向けて」は言及している。このような人々の経験と知識から多くを学びつつ、日本に足跡をしるしたユダヤ人の歴史と思想について勉強することが願われて、「世界大戦中の『流氓（りゅうぼう）[29]ユダヤ人』と深く結びついた神戸で、『日本・ユダヤ文化研究会』の発足」[30]が提案されている。

この「『日本・ユダヤ文化研究会』の発足に向けて」の最後には、上述した主題の他に、さらに以下のようなものを取り上げることが表明されている。それらは、日本における judentum とキリスト教の関係（judentum はドイツ語）、日本におけるカバラー研究、映画「ショア」の神戸上映、「流氓ユダヤ」写真展、ユダヤ人にゆかりのある日本国内の街あるいはアジア諸国への旅の企画、機関紙発行、日本・ユダヤ関係文献の収集である。以上のように研究会が行なう活動として、包括的

な内容が提案されている。

続いて『ナマール』に掲載されてきた「日本・ユダヤ文化研究会会則（抄）」の考察を行なう。この会則は、『ナマール』第 2 号で表現が若干改められ、『ナマール』第 9 号より会の名称に変更はあるが、文書中に大きな変化は見られない。ただ第 9 号の編集後記において、会の名称を変更した説明として、「日本においてユダヤの歴史や文化と向かい合う、という精神に変わりはないものの、神戸という会発足の地とのつながりをよりつよく意識しながら、この地からの発信と、文化活動を続けていく、という趣旨が新たに加わりました」とある。これは、研究会がより地元に根ざした活動も行なっていくことを確認したと理解できる。

会則の内容は、研究会の発足の趣旨から始まる。それは、世界史の中で精神文化、科学、芸術等に多大の貢献をしてきたユダヤ人に歴史や思想を学びつつ、日本の中で新しい文化の芽を育てたい、というものである。そして会の名称にもある「文化」の強調が以下の文からも明らかである。「当会設立の呼びかけ人および有志は、非宗教的、非政治的な『文化活動』を行なう会であることをめざし、ユダヤ文化の幅広い研究活動に加えて国際的な人事交流を促進することを願っています」。[31]この会則では、ユダヤ文化と日本文化の理解を深め、文化的な創作活動を行なうことを目的とし、また日本人とユダヤ人の相互交流を主とした国際親善を図ることも表明されている。

3. 京都ユダヤ思想学会[32]

「『京都ユダヤ思想学会』発足のご挨拶」は、2008 年に書かれる。学会誌の『京都ユダヤ思想』創刊号は 2009 年度に刊行予定であり、この挨拶文は、7 月 21 日現在、インターネットで閲覧が可能である[33]。まだ紙媒体として掲載されていないこともあり、実際の学会誌に掲載されるものと一致しない可能性もある。この挨拶文の最後には、発起人代表として、勝村弘也[34]、手島勲矢[35]、後藤正英[36]の名前、発起人として 16 人の名前[37]、さらに賛同者として 24 人の名前[38]が掲載されている。

この挨拶文は、本邦と西洋の精神文化の関係から始まる。それによれば、キリスト教的背景を持つ西欧文化の探求において、近代日本の精神的巨人の多くは、ヘブライズムとヘレニズムのあいだに見られる対話と緊張に、西洋精神史の奥行きと多様性を見出した。この西洋精神との出会いにおいて、わが国の固有の精神の在り処が問われ、とりわけヘブライズムに魅せられたものが少なくなかったことは、注目に値すると考えられている。

そしてユダヤ思想研究の「在り処」を求めて、京都を中心にささやかな集いの発足を呼びかけることとなったとされ、京都が、有賀鐵太郎（1899－1977）、平石

善司（1912－2006）、森田雄三郎（1930－2000）などのユダヤ思想研究の先達の研究の場であったことに言及がなされる。有賀は同志社大学神学部および米国ユニオン神学校で学び、のちに同志社大学神学部と京都大学文学部哲学科宗教学第二講座（基督教学）で教授を勤めた。彼は、ドイツでラビを務め、宗教思想家でもあったレオ・ベック（1873－1956）の著した『ユダヤ教の本質』を翻訳し、戦後すぐに刊行している（1946 年／昭和 21 年）[39]。次に有賀の薫陶を受けた人物として平石が紹介される。彼は同志社大学文学部の教授で、フィロン（ca. 15 B.C.E－45 C.E.）研究で大きな業績を残したのみならず、マルティン・ブーバー（1878－1965）の思想を紹介した草分けと評されている。森田は同じく有賀の薫陶を受け、同志社大学商学部教授を長く勤めた人物である。その晩年にユダヤ思想研究への強い意欲を顕わし、志半ばに逝去したが、その想いは発起人に通じるとされている。

続いてこの挨拶文は、「京都ユダヤ思想学会」設立にもつながる、ここ数年の院生レベルでの交流に言及する。ユダヤ思想研究の真剣な学術的研鑽の場を求める機運が、京都大学と同志社大学の大学院生のあいだに生じ[40]、偉大な先達の学問的情熱を引き継ぐことを目ざし、学会設立の運びになったとされる。そしてこの機運が、京都大学大学院文学研究科キリスト教学専修の学生と修了者を中心とする聖書ヘブライ語の研究会と、同志社大学神学研究科において大学院生を中心に始まったアブラハム・ヘシェル（1907－1972）読書会の面々が合宿をはじめとする共同の学びを続ける中で、自発的に生まれたものであることが言及されている[41]。

次に学会の関心についての説明があり、そこには多様な学問分野とディシプリンを背景にもつ会員構成をそのまま反映しているとある。つまり、歴史的には古代、中世、近現代に通じ、資料言語としてヘブライ語、各種アラム語、ギリシャ語、ラテン語、アラビア語、ドイツ語、フランス語、英語などである[42]。またユダヤ思想の理解に焦点を置きつつも、キリスト教、イスラーム、近・現代哲学、文学、様々な地域の文化・文明の歴史研究など、多岐に亘る分野との比較・連係をめざすとしている。そしてこの学会の領域と方法については、「聖書からヘシェルまでの『ユダヤ思想テキスト』またはユダヤ文化とユダヤ人文学に関する諸資料の、歴史的・思想的理解に資する、読解と分析と比較研究」が学会の紐帯として存在すると考えられている。

そして挨拶文は、19 世紀初頭に起こったユダヤ人の手による歴史研究について言及している。それによると、西欧のユダヤ教理解は、長い期間に渡ってキリスト教神学からある種の制約を蒙ってきており、これを是正しユダヤ人の歴史的実像を示すべく「ユダヤ学」が誕生した[43]。学会のひとつの目論見として、この 19

世紀初頭以来の西欧における「ユダヤ学」の伝統と、「日本に蓄積された西洋思想・哲学研究の学術伝統との出会いを促す」ことであるとされている。続いて、京都ユダヤ思想学会という名称に関わる一文がある。それによると、「発起人一同はこの学会が、京都という独自の精神的風土に培われた各世代の研究者による相互研鑽と若手研究者の育成の場となると同時に、真摯にして闊達、創造的にして堅実な学術交流のサロンであること」を願うとされている。

次に学会の規約においても学会の指針が表明されているので、この考察を以下に若干行なう。第一条は、会の名称が京都ユダヤ思想学会であり、学会が京都に活動の拠点を置き、日本におけるユダヤ学研究の発展に寄与することを目的とする、としている。第二条は、学会の名称にもある「ユダヤ思想」という言葉の定義を問題にしている。それによると、学会においては、この言葉を「狭義の哲学思想だけでなく、歴史、文学、芸術といった多面的な領域を総合しながら、ユダヤとは何かを理解しようとする営みとして理解する」[44]。また以上のようなユダヤ教自身の自己理解のみならず、他宗教や他文化から見たユダヤ教という視点も重視することが言及されている。そして条項の最後にあたる第十一条では、学会がいかなる反ユダヤ主義団体とも関係をもたないとされている。

4. おわりに

以上の研究会・学会の趣意書等の考察を通し、幾つかの主要な点が浮かび上がった。まず方法において 3 つの学術団体が共有している点として、内在的なユダヤ理解を重要視するということを指摘できる。二点目として、反ユダヤ主義の問題を指摘する。この問題に関しては、日本ユダヤ学会と神戸・ユダヤ文化研究会は批判的に扱うと明言している。京都ユダヤ思想学会は、いかなる反ユダヤ主義団体とも関係をもたないとしており、反ユダヤ主義に対して批判的であるという基本線では 3 つの学術団体は共通点をもつ。また日猶同祖論も一つの主要な点と指摘できる。日本ユダヤ学会と神戸・ユダヤ文化研究会の両者には日猶同祖論への同様の警戒が示されていると思われる。日本ユダヤ学会と神戸・ユダヤ研究会の文書における違いとしては、後者が歴史的にユダヤ系あるいはユダヤ教徒の人々の存在した時代と地域に言及していることである。なおこの問題に関して、京都ユダヤ思想学会は、その文書中で論点として扱っていない。

次の主要な点はイスラエルについてである。日本ユダヤ学会では、旧称からこの名詞がなくなりはしたが、現代イスラエルがこの会の主要な関心事の一つであることには変わりないと明言している。神戸・ユダヤ文化研究会と京都ユダヤ思想学会の文書中では、イスラエルという名詞が使用されておらず、日本ユダヤ学会と比較すると、その立場が不明瞭である。ただ神戸・ユダヤ文化研究会の文書

中には、移住をするユダヤ人の姿が散見され、「流氓ユダヤ人」などの表現もあることから、この研究会がいわゆるディアスポラ（離散）の状況にあるユダヤ人を重要視していることが理解できる。論者は、このユダヤとイスラエルの関係をいかに理解するかが、ユダヤ学において一つの重要な課題であると考える。

註

[1] 本論文を作成するにあたり、宮澤正典先生より日本における初期のユダヤ研究者に関する話を、神戸松蔭女学院大学の勝村弘也先生より、京都における初期ユダヤ研究に関するお話をお伺いした。先生方のご協力に心よりの感謝を表したい。なお宮澤先生には、日本のユダヤ学史理解にとって重要となる以下のような著作がある。『ユダヤ人論考：日本における議論の追跡』新泉社 1973 年（1982 年に増補版が発刊）、『日本人のユダヤ・イスラエル認識』昭和堂 1980 年、『日本におけるユダヤ・イスラエル論議文献目録：1877－1988』新泉社 1990 年、『日本におけるユダヤ・イスラエル論議文献目録：1989－2004』昭和堂 2005 年。

[2] 近代以前におけるイスラームのユダヤ・イスラエル理解に関する研究は、本邦でほとんど進んでいない状況にある。本誌に同時掲載されている辻圭秋の「S.D. Goitein のイスラーイーリーヤート理解――神教研究の観点から」は、この分野における先駆的な研究である。

[3] それぞれの学会が多様な活動を行なっており、これらの学術団体のユダヤ研究への姿勢を総括することは本論の目的ではない。本論では、会誌の趣意文等を主な考察の対象とする。

[4] 英語表記：The Japan Society for Jewish Studies（旧称：Japan Association for Jewish Studies）

[5] 以下、論文全体を通して敬称を省略する。

[6] 久米島秀三郎（1888－1970）は、1959 年／昭和 34 年に『世界ところどころ　イスラエルの巻』を相模書房より出版している。

[7] 小林正之（1897－1970）に関しては、『ユダヤ・イスラエル研究』日本イスラエル文化研究会 2004 年、第 20 号に、追悼文が掲載されている。彼は以下の本を翻訳・執筆している。ノーマン・ベントウィッチ『再建のイスラエル』早稲田大学出版部 1960 年、ハリー・オーリンスキー『偶像への挑戦―古代イスラエルの歴史と伝統』教文館 1961 年、小

林正之『ユダヤ人―その歴史像を求めて―』成甲書房 1977 年。ノーマン・ベントウィッチ（1883－1971）は、イギリス生まれのユダヤ系法学者である。彼は、パレスチナ委任統治政庁の法務総裁やヘブライ大学教授などの経歴も持っている。ハリー・オーリンスキー（1908－1992）は、アメリカにおけるユダヤ系の聖書学者・言語学者である。

[8] 杉田六一（1897－1976）に関しては、『ユダヤ・イスラエル研究』日本イスラエル文化研究会 1975 年／昭和 55 年、第 8・9 合併号に、年譜と追憶文が掲載されている。彼は以下のような著作を刊行した。『ユダヤ王ヘロデ』教文館 1957 年、『国際紛争の焦点イスラエル』教文館 1957 年、『ユダヤ革命：西紀 66－77』教文館 1958 年、『離散（ディアスポラ）のユダヤ人：ユダヤ革命その後』教文館 1960 年、『ユダヤ史研究余談』教文館 1962 年、『イスラエル史雑考』教文館 1964 年。杉田は『国際紛争の焦点イスラエル』、『ユダヤ史研究余談』と『イスラエル史雑考』において、数多くのユダヤ人の研究を参照しており、日本の初期ユダヤ学史の観点から先駆者的な人物の一人と考えることができる。

[9] 西村関一（1900－1979）は、『イスラエル・インド紀行』を 1964 年／昭和 29 年に一古堂書店より刊行している。

[10] 長谷川真は（1916－）、東海大学の教授だった。彼はシーセル・ロス（Cecil Roth: 1899－1970）の『ユダヤ人の歴史』を翻訳し、1966 年にみすず書房より刊行している。ロスは、ユダヤ歴史家であり、*Encyclopaedia Judaica*（first edition）の編集長をつとめた人物である。彼はオックスフォード大学でユダヤ学の講義をもち、その後イスラエルのバル・イラン大学やアメリカのニューヨーク市立大学クイーンズカレッジで教えた。

[11] 林知己夫（1918－2002）は、統計数理研究所名誉教授である。

[12] 馬場嘉市（1892－1985）の名前は、『ユダヤ・イスラエル研究』の 1970 年／昭和 45 年、第 5・6 合併号まで理事として名前が掲載されている。同誌の 1970 年／昭和 50 年、第 7 号以降より名前が見られなくなっている。馬場は聖書学を中心とした著書・訳書を数多く残している。日本における初期ユダヤ学史を考える上で、それらの著作の中で重要になると思えるものは、馬場が翻訳した E.L. エールリッヒの『イスラエル史―原始から神殿破壊（後 70 年）まで―』（日本基督教団出版部 1962 年）である。エールリッヒ・エルンスト（Ernst Ludwig Ehrlich: 1921－2007）は、ベルリンに生まれたユダヤ人で、第二次世界大戦中の 1943 年にスイスに逃れ、バーゼルで学究生活を続けた。

[13] 山本吉雄は、公認会計士としての本務が多忙という理由で 1967 年に退会している（『ユダヤ･イスラエル研究』日本イスラエル文化研究会 1970 年／昭和 45 年､第 20 号､80 頁）。

[14] 『ユダヤ・イスラエル研究』日本イスラエル文化研究会 2004 年、第 20 号、122 頁。

[15] 『ユダヤ・イスラエル研究』日本ユダヤ学会 2007 年、第 22 号、1 頁。

[16] 『ユダヤ・イスラエル研究』日本イスラエル文化研究会 1961 年／昭和 36 年、創刊号、1 頁。

[17] 同上。

[18] 同上。

[19] 同上。

[20] 同上。

[21] 同上。

[22] この趣意以前に「ユダヤ学」という表現が用いられているのを、論者はまだ見つけていない。表現がこの趣意において初出である可能性が考えられる。そして「ユダヤ学」という表現の発生は、日本のユダヤ学史において重要なことである。

[23] 『ユダヤ・イスラエル研究』創刊号、2 頁。

[24] 同上。

[25] 『ユダヤ・イスラエル研究』第 22 号、1 頁。

[26] 英語表記：Japanese-Jewish Friendship and Study Society in Kobe = JJSK（旧称：Japanese-Jewish Friendship and Study Society = JJS）

[27] 小岸昭（1937－）は京都大学総合人間学部教授であった。著書・訳書として以下のものがある。共著『カフカの解読』駸々堂 1982 年、『スペインを追われたユダヤ人：マラーノの足跡を訪ねて』人文書院 1992 年、『マラーノの系譜』みすず書房 1994 年、『離散するユダヤ人』岩波書店 1997 年、ショーレム『カバラとその象徴的表現』法政大学出版局 1985 年、デッシャー『水晶の夜』人文書院 1990 年、ヨベル『スピノザ 異端の系譜』人文書院 1998 年。

[28] 『ナマール』神戸・ユダヤ文化研究会 1996 年、創刊号。

[29] 『広辞苑第六版』岩波書店 2008 年、2958 頁によると、「流氓」とは、「他郷に流浪する民。流民」とある。

[30] 『ナマール』創刊号。

[31] 『ナマール』神戸・ユダヤ文化研究会 2004 年、第 9 号。

[32] 英語表記：Kyoto Association of Jewish Thought

[33] 2009 年 7 月 21 日：http://www1.ocn.ne.jp/~hebraica/sub3.html。この挨拶文は学会として設立される際に、会員呼びかけとして配布されている。

[34] 勝村弘也（1946－）は、神戸松蔭女子学院大学総合文芸学科教授であり、京都ユダヤ思想学会の会長である。著書・訳書として以下のものを上げることができる。『詩篇注解』日本基督教団・宣教委員会「"現代の宣教"のための聖書注解書」刊行委員会 1992 年、『ユダヤの知恵　箴言カレンダー』聖公会出版 2003 年、G・フォン・ラート『イスラエルの知恵』日本キリスト教団出版局 1988 年、共訳『旧約聖書 XIII　ルツ記、雅歌、コーヘレト書、哀歌、エステル記』岩波書店 1998 年、『旧約聖書 XII　ヨブ記、箴言』岩波書店、2004 年。

[35] 手島勲矢（1958－）は、同志社大学神学部の教授である。著書・訳書として、以下のようなものがある。編著『わかるユダヤ学』日本実業出版社 2002 年、編著『ユダヤ人と国民国家』岩波書店 2008 年、ラビ・ピンハス・ペリー『トーラーの知恵』ミルトス 1988 年、D・フルッサル、G・ショーレム『ユダヤ人から見たキリスト教』山本書店 1986 年。

[36] 後藤正英（1974－）は、佐賀大学文化教育学部の準教授である。以下のような共著と訳書がある。共著『ユダヤ人と国民国家』岩波書店 2008 年、シェリング『シェリング著作集 1』燈影舎 2009 年。

[37] 2008 年の段階では、伊藤玄吾だけが同志社大学助教であり、その他のメンバーは、同志社大学ないし京都大学の博士課程在籍者・前期博士課程修了者である。ちなみに論者は学会の発起人の一人である。以下が発起人 16 人の名前である。石橋誠一、伊藤玄吾、上原潔、大澤耕史、小田雄一、北村徹、篠田知暁、高尾賢一郎、津田一夫、中西麻由美、永芳稔、平岡光太郎、堀川敏寛、松本浩希、森山徹、横田徹。

[38] 以下が 24 名の名前である（職名は挨拶文には掲載されておらず、論者が付加した）。荒井章三（元神戸松蔭女子学院院長）、飯謙（神戸女学院大学文学部教授）、池田裕（筑波大学名誉教授）、石川文康（東北学院大学教養学部教授）、市川裕（東京大学大学院人文社会系研究科教授）、上野修（大阪大学大学院文学研究科教授）、臼杵陽（日本女子大

学文学部教授)、大橋良介（龍谷大学文学部哲学科教授)、小田淑子（関西大学文学部教授)、菅野賢治（東京理科大学理工学部教授)、木田献一（山梨英和大学学長)、氣多雅子（京都大学大学院文学研究科教授)、合田正人（明治大学文学部教授)、小原克博（同志社大学神学部教授)、島薗進（東京大学大学院人文社会系研究科教授)、新免貢（宮城学院女子大学学芸学部教授)、竹田文彦（聖トマス大学人間文化共生学部教授)、中田考（同志社大学神学部教授)、長田浩彰（広島大学総合科学部准教授)、野本真也（学校法人同志社理事長)、松山壽一（大阪学院大学経営学部教授)、丸井浩（東京大学大学院人文社会系研究科教授)、水垣渉（京都大学名誉教授)、村岡崇光（ライデン大学名誉教授)。

[39] 2008 年にもたれた京都ユダヤ思想学会の第一回学術大会では、会長である勝村弘也が「レオ・ベックと有賀鐵太郎―京都におけるユダヤ学の黎明―」の講演を行っている。日本におけるユダヤ学の黎明が、京都にあったことの指摘は、日本の初期ユダヤ学史を考える上で重要な論点である。

[40] この大学院生全員が、必ずしも狭義の「ユダヤ思想」研究を主要な課題としていたわけではない。ユダヤ思想研究の他に、キリスト教神学、イスラーム研究、聖書学、宗教哲学、ユダヤ文学、歴史研究、比較社会学、イスラエル考古学など様々な領域を主要な課題としていた状況がある。以上の領域は、ヘシェル読書会や合宿に参加していた大学院生の主要領域を、論者が記憶する限り挙げたものである。

[41] 同志社大学に一神教学際研究センターが創設され、同大学の神学研究科と一体になって行われた教育と研究が、京都ユダヤ思想学会設立の基盤になったと、論者は考える。

[42] 学会として行なった研究合宿では、イディッシュ語講座を 2 年連続でもっている。このことからも、この挨拶文にイディッシュ語を入れるべきとの意見も会員より出ている。

[43] この 19 世紀に起こったユダヤ人による「ユダヤ学」を本邦で体系的に初めて紹介したのは、手島勲矢の「ユダヤ学のすすめ（3～8)」『月刊ミルトス』（ミルトス 1997 年、第 22～27 号）である。近代ユダヤ人自身の間に起こった「内在的な」議論の発生を感得した点は、日本のユダヤ学史を考える上において重要になると思われる。

[44] 2009 年 7 月 21 日：http://www1.ocn.ne.jp/~hebraica/sub9.html